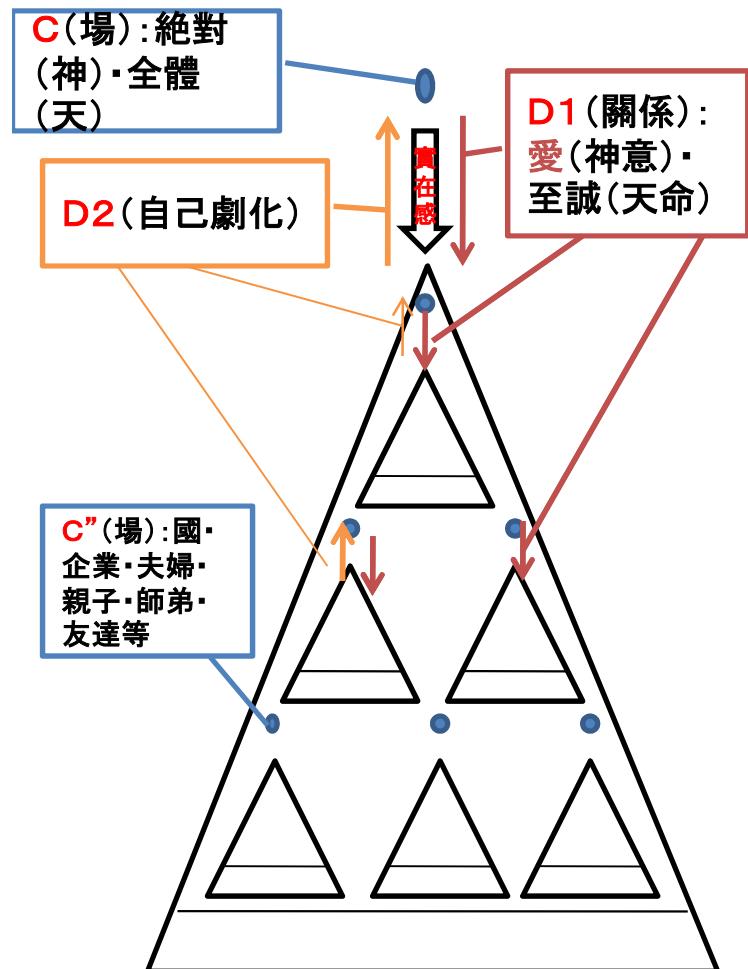


愛は場(C及びC")から生ずる「關係:D1」。即ち「神が人間を愛する如く、人間も隣人を愛せよ」(神意)…是は「完成せる統一體としての人格」論にも通じる。



〔左圖、「完成せる統一體としての人格」論、難解部分の、恒存原文による補足〕

「問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買つてゐる國民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集團的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一體たらしめる原動力は何かといふ事である。それは純粹な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力(時間的全體・空間的全體:小生注)に繋つてゐなければ、人格は崩壊する。現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」(全集六P703~4『覺書』)と。

二役のみならず何役(國民の一人、公務員の一人、家族の一人)、操る「自己劇化」が出来得る人格として、「完成せる統一體としての人格」論がそこに登場するのである。何役かを操る「自己劇化」を別な表現では、各場面場面で關係的眞實を生かしていくのだと、との内容で言つてゐる。その究極が「完成せる統一體としての人格」なのだと。以下恒存の文を索引しながらその内容を記載する。括弧内は小生注である(「テキスト十圖及び十一圖」:参照)。何役かを操る各場面でそこから発生する、關係の「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(役を演ずる・自己劇化)」「演戯なしには人生は成り立たない。つまり假説なしには成り立たない」。「眞實といふのは、ひとつの關係の中にある。個々の實體よりはその關係の方が先に存在している。人生といふものは、關係(目上↔目下・親↔子・師↔弟子・國↔國民、等々)が眞實なんで、一生涯自分のおかれた關係の中でもつて動いてゐる。いろいろな關係を處理していき、それらの集積された關係がその人の生涯といふもの。それを私は演戯だといふ」「われわれがこしらへたものは、相對的であつて絶對ではないといふ原理をちゃんと心得て、こいつを絶對化(假説の完璧化・築城の完璧化)しようといふ努力」。(單行本『生き甲斐といふ事』中、對談「反近代につひて」P1 95・199)即ち要約すれば、各場面場面(國・企業・夫婦・親子・家庭・兄弟・師弟・友達・他者・等)から生ずる、關係と言ふ眞實(目上↔目下・親↔子・師↔弟子・國↔國民、等々)。その「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(「眞實・至誠・愛・慈悲」等と言ふ名の宿命的役を演ずる:自己劇化)」。さうした行動の中に、しかもそれが典型として「テキスト十圖」の如く「假説の完璧化」が果たせられた場合に、「完成せる統一體としての人格」が現成するのである、と恒存は言ふ。